

# 古代韓半島における唐代腰帯の受容

中川 あや

- I. はじめに
- II. 唐代腰帯の様相
- III. 韓半島出土唐式腰帯の様相
- IV. 韓半島における唐式腰帯具の独自性とその背景
- V. おわりに～東アジアにおける唐代腰帯の受容

**要 旨** 唐の時代、官人の服装の一部として制度化された腰帯は、周辺諸国における唐制の受容に伴って各国で導入された。身分制度に関わる装身具のうち、現在にまで形をとどめるものは、腰帯に装着された金具（腰帯具）のみと言っても過言ではなく、唐文化の拡散の様相のみならず、衣服制度の実態や、その背景にある社会情勢を垣間見ることができる稀有な遺物である。本稿では、古代韓半島において、唐代腰帯がどのように受容されたのか明らかにすることを目的とする。基礎作業として、中国出土資料と韓半島出土資料について、表金具の構造に基づいた型式分類をおこなった。それらを比較検討した結果、古代韓半島の唐代腰帯の受容は7世紀中葉頃に始まり、当初は唐同様、銅素材を主体とした腰帯具の製作をおこなっていたが、8世紀後半以降、徐々に唐とは異なる構造・形態・構成の鉄製腰帯具が増加する、という流れを明らかにした。このような状況は、統一新羅の中央政権の弱体化と、それに伴う国家の混乱を反映している可能性がある。また、隣国日本の状況と比較すると、ほぼ同様の時期に唐代腰帯の模倣を停滞させており、唐代腰帯具は東アジアにおける唐文化の受容と展開を考える上で、注目すべき一材料であるといえる。

キーワード 腰帯 唐 韓半島 受容

## I. はじめに

唐の時代、官人の服装の一部として制度化された腰帯は、周辺諸国における唐制の受容に伴って各国で導入された。腰帯は官人とともに墳墓に副葬されるケースが多く、本体は腐敗により残らないが、腰帯に装着された金属製の飾り金具（腰帯具）は、現在出土品として目にする事ができる<sup>1</sup>。身分制度に関わる装身具のうち、現在にまで形をとどめるものは腰帯具のみと言っても過言ではなく、唐文化の拡散の様相のみならず、衣服制度の実態や、その背景にある社会情勢を垣間見ることができる稀有な遺物である。

中国以外で唐式腰帯具<sup>2</sup>の出土が確認されているのは、韓半島、日本、ベトナムなどであるが、出土数は日本が群を抜いて多い。それゆえ、日本では腰帯具を扱った研究が盛んになされ、型式変遷や生産体制、身分表象の問題まで多岐にわたる議論が展開されている。近年、韓半島においても出土数が増加し、徐々に研究が進められてきたが、どちらかという国内資料の検討に比重が置かれてきた。しかし、韓半島の腰帯具は中国や日本と比べて多様で、自国の資料のみでの型式分類や年代把握に困難を伴う。また、隣国日本の腰帯は、唐代腰帯の変遷に影響をうけた展開をみせており、韓半島においても同様の可能性を考慮すべきであろう。そこで本稿では、基本となる中国出土腰帯具について詳しく検討し、それを参照しつつ、韓半島出土腰帯具の位置づけをおこなう。それを踏まえて、古代韓半島における唐代腰帯の受容がどのように行われ、展開していったのかを明らかにしたい。

## II. 唐代腰帯の様相

### （1）文献にみる腰帯

『旧唐書』や『新唐書』、『唐会要』によると、唐で初めて衣服制が制定されるのは武徳四年（621）のことである。ただし、腰帯に関わる詳細な記事は上元元年（674）が初現である<sup>3</sup>。文武官とも三品以上は金玉帯13銖、四品は金帯11銖、五品は金帯10銖、六品・七品は銀帯9銖、八品・九品は鍮石帯9銖、庶人は銅鐵帯7銖と定められ、腰帯具の材質・数が身分によって異なった様子がうかがえる<sup>4</sup>。

### （2）呉忠唐墓出土の腰帯具

唐の官人たちが装着していた腰帯が実際どのようなものであったのかを、唐墓出土品から復原してみたい。近年、寧夏回族自治区・呉忠市西郊、北郊において、腰帯具が副葬された唐墓が多数発見され、腰帯具の出土状況や構造などが詳細に報告されている<sup>5</sup>。この地域は唐代の靈州と呼ばれた地域にあたる。中原から離れた一地方の唐墓ではあるが、これほど多数の唐代腰帯具が詳細に報告された例はこれまでになく、これらを十分に検討することで、唐代腰帯具の様相の一端を窺えると考えられる。また、腰帯具は、中央の規制に則っ

第1表-1 吳忠西郊唐墓出土腰帯具

西郊墓	材質	型式	垂孔 (横幅/ 縦幅)	方形金具			半円形金具				鉸具	鉤尾	
				個数	紙	寸法 (cm)	裏金具	個数	紙	寸法 (cm)			裏金具
M3	銅	I	3.0	—	—	—	—	1	3	2.7×1.7	○	○	×
M5		I	3.0	1	4	3.1×2.7	○	2	3	3.1×2.1	○	×	×
M8		I	3.1	2	4	2.6×2.4	○	6	3	2.5×1.8	○	×	○
M20		I	3.0	1	4	3.1×2.6	○	6	4	2.9×2.1	○	○	○
M4		II	3.5	—	—	—	—	4	4	2.6×2.1	○	—	—
M21		II	3.0	1	4	3.2×2.8	○	山3	3	2.8×2.8	○	—	—
M22		II	2.3	4	4	3.2×2.8	○	山1	3	2.6×2.0	○	○	—
M30		II	3.3	2	4	3.2×2.8	○	7	3	3.2×2.2	○	○	○
M98		II	—	—	—	—	—	1	3	3.5×2.5	—	—	—
M9		III	5.1	1	4	2.6×2.2	○	—	—	—	—	—	—
M18		III	5.0	4	4	4.5×4.6	○	蒲5	3	3.4×4.4	○	—	○
M80		III	12.5	1	4	3.8×3.6	○	蒲3	3	4.1×3.5	○	○	○
M89		III	10.0	—	—	—	—	蒲3	3	4.1×3.3	○	—	○
M12		I	—	1	4	3.2×3.0	○(銅・鉄)	蒲1	3	3.7×2.7	○(銅)	—	○
M16		I	?	2	?	3.8×3.8	○	—	—	—	—	—	○
M29		I	9.0	1	?	4.2×4.0	○	蒲3	3	4.6×4.0	○	—	○
M44		I	—	1	4	3.6~3.8	○(銅)	蒲1	3	4.0×3.5	—	—	○
M48		I	?	1	?	4.2×4.2	?	蒲1	?	4.0×4.0	?	—	—
M50		I	—	2	4	4.2×4.2	?	—	—	—	—	—	○2
M51		I	12.0	3	4	4.0×3.7	?	蒲?1	?	4.8×4.0	?	—	—
M53	I	—	1	?	4.9×4.8	?	—	—	—	—	—	○	
M76	I	7.0	3	?	4.5×3.8	○	—	—	—	—	○	○	
M85	I	7.0	—	—	—	—	蒲1	3	3.0×2.3	○(銅)	—	○	
M92	I	8.3	2	?	4.7×4.3	—	蒲2	3	4.1×3.0	—	—	—	
M96	I	—	3	?	4.8×4.5	○	蒲5	3	4.6×3.9	○	—	○	
M104	I	8.3	2	4?	4.0×4.0	—	蒲2	3?	4.0×3.0	—	—	—	
M105	I	8.0	2	4	5.0×4.8	—	蒲5	3	5.0×4.0	○(銅)	—	○2	
M13	銅裏 金具	(銅Ⅲか鉄ⅰ)	6.0	1	?	3.3×3.0	/	—	—	—	/	—	○
M25		(銅Ⅲか鉄ⅰ)	6.6	1	4	4.1×4.1	/	—	—	—	/	—	—
M99		(銅Ⅲか鉄ⅰ)	—	1	4?	3.1×1.8~	/	—	—	—	/	—	—

て製作されたものが、官人たちの移動に伴って全国に拡散したと考えられるため、陶器や俑のような地域色が現れにくいと推測される。したがって、まずは吳忠西郊・北郊唐墓出土資料の分析を行ったうえで、それらと中国全土の出土資料の様相を比較し、情報を補った上で、唐代腰帯具の全体像を復原していきたい。

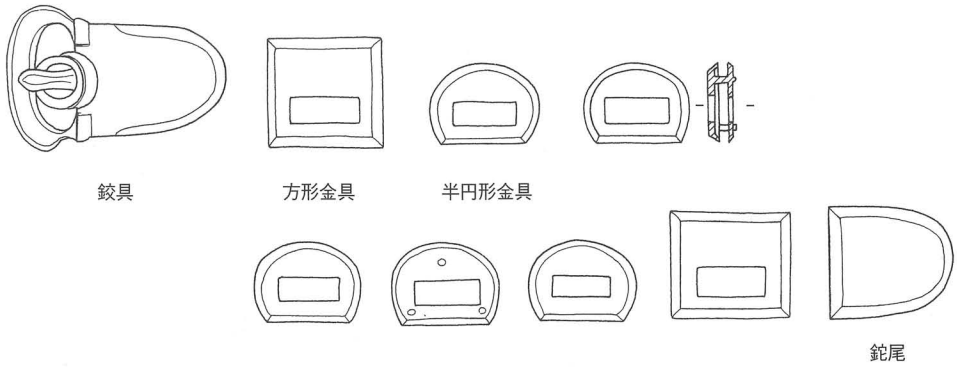
吳忠西郊・北郊唐墓はいずれも寧夏回族自治区の中部、黄河の中上流地区に位置し、いずれも東西約5キロ、南北約3キロ前後の範囲に、それぞれ唐墓120基、唐墓107基が確認された。西郊唐墓ではそのうちの30基で、北郊唐墓では同じく33基で腰帯具の出土があり(第1表)、後代の盗掘や攪乱も影響して全体的に副葬品の出土量が少ない中、陶器につ

第1表-2 吳忠西郊唐墓出土腰帶具

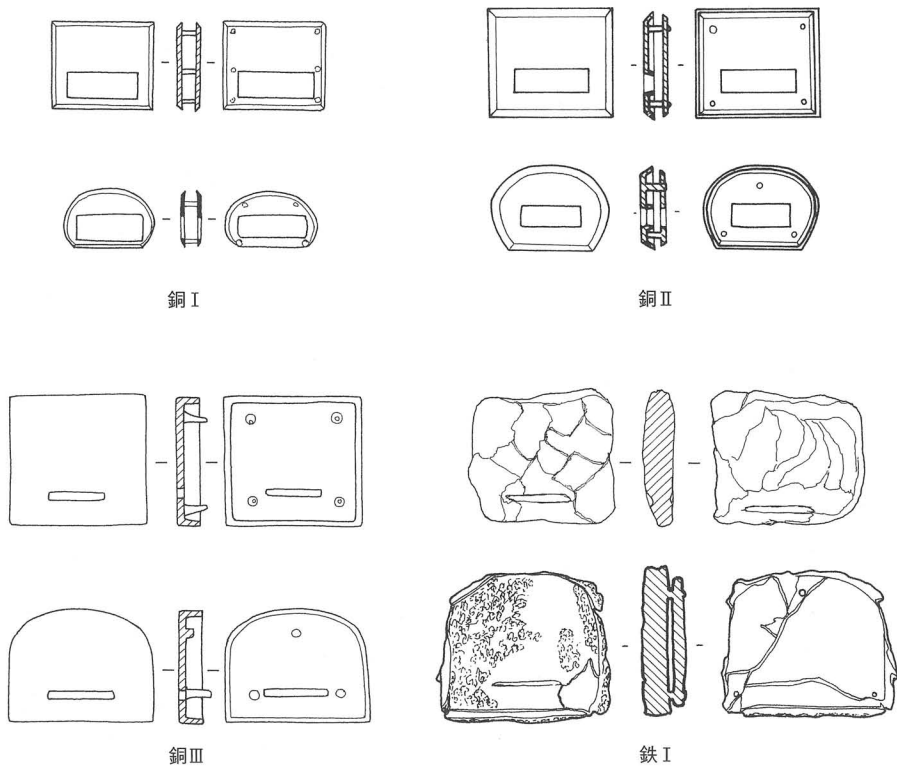
北郊墓	材質	型式	垂孔 (横幅/ 縦幅)	方形金具				半円形金具				鉸具	鉞尾
				個数	鉞	寸法 (cm)	裏金具	個数	鉞	寸法 (cm)	裏金具		
M2	銅	I	3.0	1	4	3.0×2.6	○	3	3	2.7×2.0	○	—	○
M13		I	2.6	—	—	—	—	2	3	2.3×1.6	○	—	○
M15		I	2.9	—	—	—	—	1	?	2.5×1.6	—	○	○
M57		I	2.6	3	4	2.6×2.4	○	4	4	2.5×2.0	○	○	—
M94		I	2.6	—	—	—	—	2	3	2.4×1.6	○	○	○2
M95		I	2.8	4	4	2.6×2.3	○	5	3	2.5×1.7	○	—	—
M96		I	3.4	2	4	2.6×2.3	○	3	3	2.4×1.2	○	—	○
M102		I	3.3	1	6	2.6×2.3	○	1	4	2.4×1.6	○	—	○
M120		I	3.3	4	4	2.6×2.4	○	2	3	2.6×1.7	○	—	○
M123		I	2.8	2	4	3.0×2.6	○	6	3	2.6×1.7	○	—	—
M23		I・II	3.0	2	2	2.7×2.4	○	—	—	—	—	—	○
M62		I・II	2.2	2	4	3.0×2.9	○	5	3	2.8×2.2	○	○	○
M20		II	2.8	1	4	3.0×2.7	○	1・山3	3	2.4×1.6	○	○	—
M59		II	3.0	—	—	—	—	2	3・4	2.8×1.8	○	○	—
M90		II	3.0	4	4	3.2×2.9	○	—	—	—	—	○	—
M114		II	2.7	1	4	2.6×2.4	○	1	5	2.5×2.0	○	—	—
M39		III	—	1	6?	3.8×3.3	○	—	—	—	—	—	—
M48		III	8.5	4	4	3.6×3.6	○	蒲4	3・5	3.7×2.9	○	○	○
M49		III	8.5	—	—	—	—	蒲1	3	3.8×3.1	—	—	—
M61		III	5.5	—	—	—	—	1	1?	3.3×2.5	—	—	—
M119-1		III	6.4	13	4	3.7×3.5	○	—	—	—	—	○	○
M7		—	2.3	1	4	2.2×1.5	○	—	—	—	—	○	—
M15		鉄	I	5.1	3	4	4.5×4.4	○(銅)	蒲3	1?	4.5×4.4	—	—
M26	I		5.4	3	4?	4.8×3.8	○(銅)	蒲2	3	4.4×3.4	○(銅)	—	—
M32	I		8.5	1	4	4.5×4.4	○(銅)	—	—	—	—	—	○
M33	I		8.0	1	6	3.7×3.4	○(銅)	蒲1	6?	4.0×3.4	—	—	○
M79	I		—	—	—	—	—	2	?	4.8×4.2	—	○	—
M101	I		—	—	—	—	—	1	?	4.4×3.8	—	—	○
M116	I		4.5	1	?	3.1×2.7	—	3	?	3.0×2.3	—	—	—
M71	?		?	1	?	6.4×5.2	—	—	—	—	—	—	—
M119-2	?		?	3	?	5.0×4.0	—	蒲2	?	4.7×3.3	—	—	—
M45	銅裏 金具		(銅IIIか鉄 i)	7?	—	—	—	—	蒲1	?	3.4×2.4	—	—
M80		(銅IIIか鉄 i)	3.0	3	5	3.0×3.2	—	—	—	—	—	—	—
M83		(銅IIIか鉄 i)	—	1	4?	3.4×2.8	—	—	—	—	—	—	—

いで腰帶具の多さが目立つ。両地区唐墓出土の腰帶具の特徴はよく似ており、それらの特徴について以下にまとめた。

- ①バックル（鉸具）、方形と半円形<sup>6</sup>、帯端金具（鉞尾）を基本構成とする（第1図）。
- ②一本の腰帶に装着される方形金具は4個が、半円形金具は7個が最多であるが、方形金具のみ装着した腰帶もみられる。
- ③材質には銅製と鉄製がある。

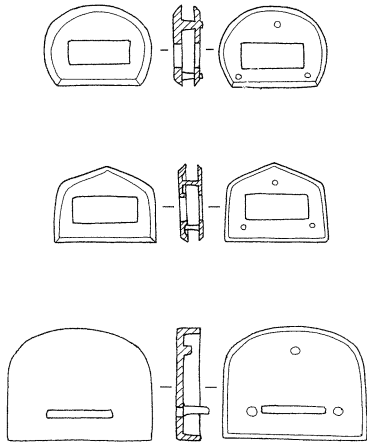


第1図 腰帯具の基本構成



第2図 吳忠出土腰帯具の型式分類(1:2)

- ④腰帯具は表金具と裏金具からなり、両者で帯を挟む構造を基本とする。裏金具は表金具とほぼ同大か一回り小さい。表裏の材質は同一素材(銅-銅、鉄-鉄)を基本とするが、異素材(鉄-銅)の組み合わせもみられる。さらに、鉄製品には裏金具のないものがある。
- ⑤方形・半円形金具の下方には長方形の垂孔が設けられるが、銅製品には楕円形の垂孔も若干存在する。



第3図 半円形金具のバリエーション(1:2)

第3表 吳忠出土腰帯具の年代観

墓名		型式	報告書 時期	共伴鏡 時期	
北	M13	鉄	I	初～盛唐	—
北	M94		I	初～盛唐	—
西	M8		I	盛唐	—
北	M2		I	中・晩唐	—
北	M23		I・II	初～盛唐	—
北	M62		I・II	初～盛唐	I期以前
北	M59		II	初～盛唐	—
北	M90		II	中・晩唐	—
北	M49		III	初～盛唐	IV期以降
北	M48		III	中・晩唐	—
西	M18		III	中・晩唐	IV期以降
北	M61		III	—	IV期以降
西	M44		I	盛唐	—
西	M16		I	—	III期
北	M15		I	中・晩唐	—
北	M79		I	中・晩唐	—
西	M92	I	中・晩唐	—	
西	M104	I	中・晩唐	—	
西	M48	I	—	IV期以降	

吳忠西郊・北郊唐墓の時期は、初唐・盛唐と中・晩唐の二期区分しかなされておらず、墓の年代のみから腰帯具の変遷を推定するのは困難である。ただし、諸属性の相関関係(第2表・第4図)を踏まえると、銅製品はI型式からIII型式への変化の方向性を想定することができる。これを、報告書で提示された墓の年代に加え、共伴唐鏡の年代観<sup>7</sup>とも照

⑥腰帯具を帯に固定するための鉤には、表金具内面に設けた鉤(内鉤)と、外面から打ち付けた鉤(外鉤)がある。銅製品は内鉤を基本とするが、外鉤によって補修したものがある。鉄製品は銹化により構造がわかりにくい、両者存在する可能性がある。

⑦表金具の構造に基づき、型式分類が可能である(第2図)

銅I：一枚板で、0.1cm前後の厚みをもつもの

銅II：0.2cm前後のわずかな側面をもち、前面と鈍角をなすもの

銅III：0.5cm前後の明瞭な側面をもち、前面とほぼ直角をなすもの

鉄I：一枚板で、0.5cm前後の厚みをもつもの

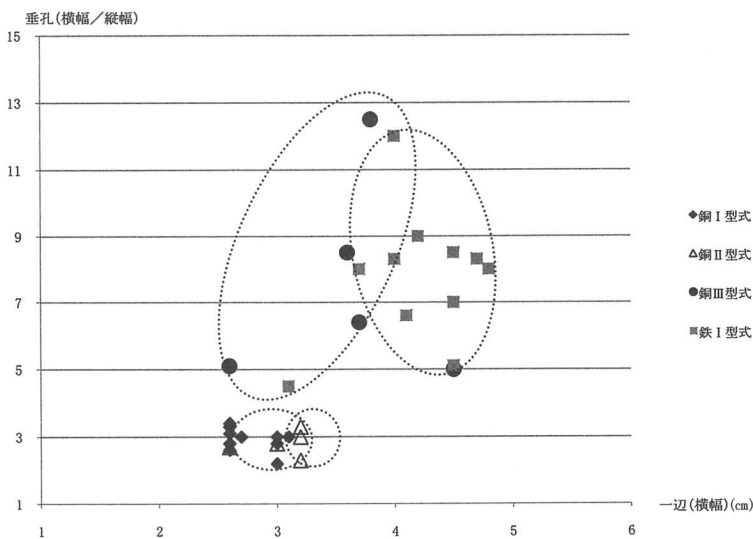
⑧長方孔の形状は、左右辺：上下辺が1対3～4前後か、1対5以上の2種類に大別できる。

⑨半円形金具の形状には、下辺のみ直線を呈するもの、下・右・左辺が直線を呈し上辺が山形に尖るもの、下・右・左辺が直線を呈し上辺のみ弧を描く蒲鉾形のもの3種類が存在する(第3図)。

⑩鉤の数は、方形金具には4本、半円形金具には3本のものが多いが、前者には6本、後者には4本、5本のものも少数存在する。

第2表 吳忠出土腰帯具各型式の属性

型式	垂孔 (横幅/縦幅)	裏金具	鍔			方形	半円形	平均寸法 (cm)	
			構造	方形	半円形			方形	半円形
銅	I	有	内鍔	4・6	3・4	正	半円	2.8×2.5	2.7×1.8
	II			4	3・4・5			3.1×2.8	2.8×2.1
	III				3・5			3.7×3.5	3.8×3.3
鉄	I	有(銅・鉄) 無	内鍔 外鍔	4・6	3	正	蒲鍔	4.5×4.3	4.3×4.0



第4図 吳忠出土腰帯具の法量と垂孔の関係

らしあわせると(第3表)、銅I・II型式は初唐～盛唐、III型式は中唐以降におおむね位置づけることができ、想定した変遷が妥当である可能性は高い。また、鉄I型式は厚みや法量の面、蒲鍔形の半円形金具を有する点で銅III型式に近いことに加え、墓・唐鏡の年代からも中唐以降に位置づけられる。したがって、吳忠唐墓出土品から推定される唐代腰帯具(方形・半円形金具)の変遷については次のように想定できる。初唐～盛唐期(唐初～8世紀前半頃)には一枚板の表金具で大きい垂孔をもつ銅製品が製作され、徐々に側面をもち、全体の寸法も大きくなる。中唐期(特に8世紀第4四半期)以降には、より側面幅が広く、垂孔は細長く、さらに寸法が大きいものに転換する。同じころ、半円形金具の形状は左右辺が直線的になり(蒲鍔形)、それに併行して同様の法量・形態の鉄製品が出現する。鉄製品の中には、銅III型式よりもさらに法量の大きいものがみられるため、最終的に、鉄製品のための段階が存在する可能性も考えられよう。

### (3) 唐代腰帯の復原

では、この吳忠唐墓資料を中国全土(渤海地域は除く)の資料と比較してみよう。これ

第4表 中国出土唐代腰帶具 (\*は一部特殊なもの)

遺跡名	構成	材質	型式	出典
北京市丰台唐史思明墓	鉸5・半円2・鉈5	鍍金銅・銀	II*	『文物』1991年第9期
河北省蔚県楡澗墓	鉸1・方4・半円4・鉈1	銅	III	『考古』1987年第9期
河北省磁県講武城古墓	銅飾腰帶2(記述のみ)	銅	—	『考古』1959年第1期
河北省臨城越天水夫婦墓	鉸1・方4・半円5・鉈1	銅	III?	『文物』1990年第5期
河北省懷来県寺湾墓	半円2(記述のみ)	銅	—	『考古』1993年第7期
河北省陽原金家庄1号墓	方・半円 計4・鉈1	鉄	III	『考古』1992年第8期
河北省蔚県九宮口墓	鉸2・方6・半円10・鉈1	銅	III	『考古』1993年第8期
江蘇省鎮江墓	鉸1・方3・半円3	鍍金銅	III	『考古』1985年第2期
江蘇省徐州花馬庄2号墓	鉸1・方2	銅	—	『考古』1997年第3期
江蘇省南京象坊村2号墓	銅帶飾5(記述のみ)	銅	—	『考古』1966年第5期
江蘇省揚州五台山26号墓	銅帶飾2(記述のみ)	銅	—	『考古』1964年第10期
遼寧省朝陽唐墓(10基分)	鉸2・方4・半円9・鉈3・他3	銅	I・II?	『文物資料叢刊』6 1982
遼寧省朝陽郊南大沟唐墓(3基分)	鉸1・方1・半円1・鉈1・他1	銅	I	『遼海文物學刊』1987年第1期
遼寧省朝陽紡績場唐墓2号墳	不明2	銅	—	『遼海文物學刊』1987年第1期
遼寧省朝陽大街唐墓M5	鉸1・半円4・鉈1	銅	II	『遼海文物學刊』1997年第1期
遼寧省双塔区3号墳	方1・鉈1	銅	I	『文物』1997年第11期
遼寧省朝陽墓(3基分)	鉸1・方1・半円2・鉈2・他2	銅	II?	『文物』1998年第3期
陝西省西安西郊	方11・半円4・鉈2	玉	—	『考古与文物』1992年第5期
陝西省西安東郊十里舖337号墓	不明14	銅	—	『文物參考資料』1956年第8期
陝西省西安東郊唐墓2号墓	方1・半円1	銅	—	『考古与文物』1981年第2期
陝西省西安南郊何家村窖藏	帯9	玉	—	『文物』1964年第2期
陝西省尉遲敬德墓	鉈1	銅	—	『文物』1978年第5期
寧夏回族自治区固原史道徳墓M1	鉸1・方2	金	II	『文物』1985年第11期
新疆自治区塩湖古墓	帯1(方13)	銅	—	『文物』1973年第10期
重慶市雲陽喬家院子遺址	方2・半円2	銅	II	『江漢考古』2002年第3期
四川省宝興縣龍東97号墓	方・半円・鉈 計13	銅	III	『文物』1987年第10期
湖北省鄖県后房村唐代崖墓M11	鉸1・方3・半円4	銅	I	『考古』2010年第1期
湖北省鄖県后房村唐代崖墓M12	半円2	銅	I	『考古』2010年第1期
湖北省武昌石碑嶺唐墓M33	方1・半円6・鉈1	銅	—	『江漢考古』1985年第2期
湖北省巴東楠木園遺址M32	鉸1・方3・半円4・鉈1	銅	II	『江漢考古』2004年第3期
湖北省巴東義種地M2	鉸1・方1・半円1・鉈1	銅	I	『江漢考古』2009年第4期
湖北省襄樊高新区黄家村唐墓4号墓	方2・半円1	銅	—	『江漢考古』1999年第4期
湖北省襄樊檀溪唐墓54号墓	方2・半円4	銅	I	『江漢考古』2000年第2期
湖北省襄樊杜甫巷唐墓M3	鉸1・方3	銅	—	『江漢考古』2000年第2期
湖南省長沙近郊35号墓	半円1	銅	I	『考古』1966年第4期
河南省上蔡県賈庄墓	鉸1・半円1・他2	金・玉	—	『文物』1964年第2期
河南省三門峽廟底沟唐墓M150	方1・鉈1	銅	I	河南省文物考古研究所『三門峽廟底沟唐宋墓葬』2006
河南省三門峽廟底沟唐墓M3	半円2	銅	I	河南省文物考古研究所『三門峽廟底沟唐宋墓葬』2006
河南省新郷唐墓M3	方1・鉈1	銅	III*	『華夏考古』2004年第3期
河南省鞏義芝田唐墓M13	鉸1・方2・半円4・鉈1	銅	II	鄭州市文物考古研究所『鞏義芝田晋唐墓葬』2003
山西省平魯県	鉸・方・半円・鉈 計82	金	III?	『文物』1981年第4期

までにおよそ40遺跡から腰帶具の出土が報告されている(第4表)。吳忠唐墓ほどまとまった出土が見られる遺跡はなく、大体が1遺跡あたり腰帶1~2本分である。構造など詳細な部分まで不明な資料が多いが、吳忠の資料でみられた銅I~III型式のどれもが存在し、垂孔や法量などとの対応関係も共通することから、唐全体で吳忠同様の型式変遷をたどったとみてよい。相違点としては、一本の腰帶に装着される半円形金具には最多9個の



もの（陝西省西安何家村窖藏）がある点、凸形の垂孔を持つもの（河北省蔚県九宮口墓）が稀に存在する点などが指摘できるが、最大の相違点は材質である。中国資料を見渡したときに、鉄製品が呉忠地域以外にほとんど報告されておらず、逆に呉忠地域にはみられ

遺跡名	構成	材質	図番号
陝西省高陵張卜西漢墓M25	半円2	銅	第5図1
湖北省三峡庫区宝塔河遺址六朝墓M9	方・鉈計12	銅	第5図2
湖北省長陽州衙坪M1	方1・半円3	銅	第5図3
陝西省西安北周安伽墓	方1・他9	銅	第5図4
陝西省西安隋姬威墓	方6・他5	玉	—
寧夏回族自治区固原隋史射勿墓	方3・半円2・鉈1・他3	銅	第5図5
寧夏回族自治区固原南塚隋墓M11	他5・鉈1・鉈1	銅	第5図6
陝西省西安鳳翔隋墓M299	他5	銅	—

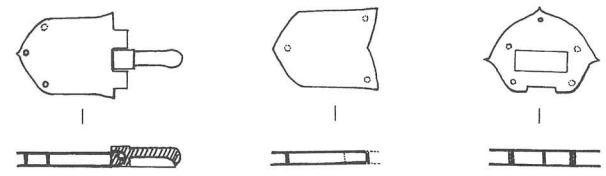
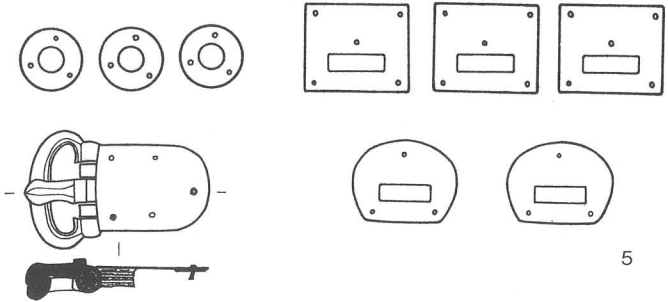
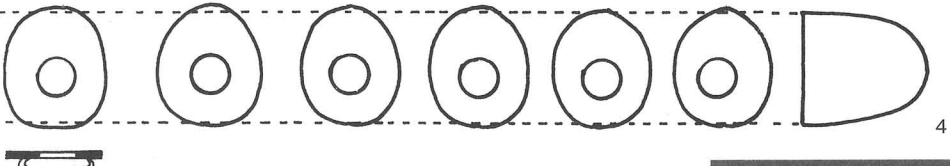
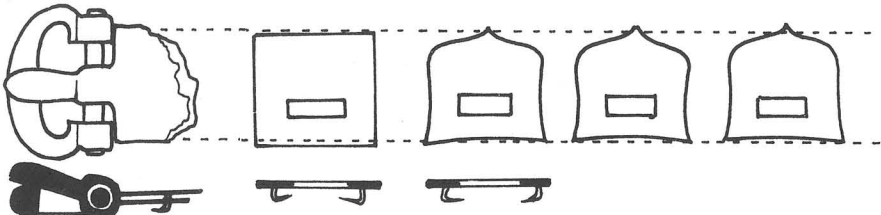
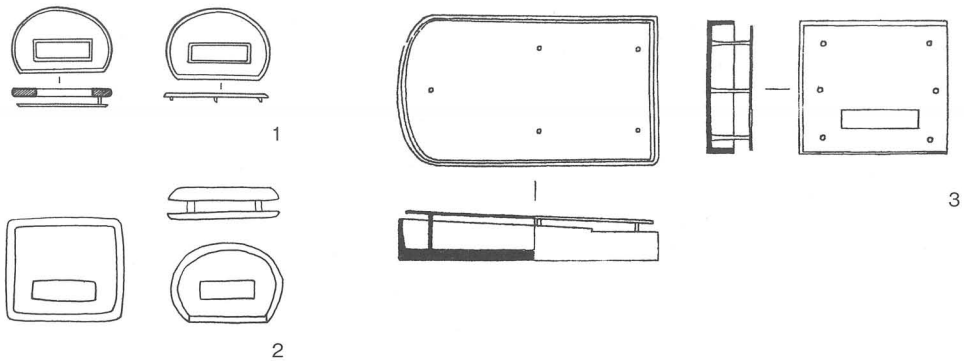
第5表 唐前代の長方孔をもつ腰帯具

なかった金・銀・玉製品が陝西省、河南省を中心に出土している。これは、先にみた上元元年の衣服令から窺われるように、上位の材質が高位の官人達に限られ、彼等が中原に集中して葬られたことを意味するのだろう。半円形金具9個の資料が玉製で、かつ西安での出土品であることは、この想定を裏付ける。また、鉄製品が呉忠地域に偏る現象については地域色という可能性があるが、衣服令の「庶人銅鉄帯」という記載を踏まえると、鉄製腰帯が全国的に用いられていた可能性も十分にある<sup>8</sup>。この中唐以降にみられる鉄製腰帯具の出現が呉忠地域に限った現象なのか、全国的に敷衍できる現象であるのかは今後の資料の増加を待って判断したい。

以上をまとめると、唐代の腰帯具は、呉忠地域と中原の資料を合わせることで、おおむね全体像を復原することができると言える。一地域の腰帯具の型式が全国的に敷衍できるという事実は、唐代の腰帯が定型性を保って全国的に分布していたことを示している。

#### （4）唐代腰帯の祖型

ここで、唐代腰帯の祖型について考えておきたい。唐前代に位置づけられ、長方孔をもつ腰帯具の出土は数が限られる（第5表・第5図）。陝西省高陵張卜西漢墓M25<sup>9</sup>では、半円形金具が2点出土している。出土位置は不明であるが、追葬などの痕跡は特にみられず、墓の年代は共伴土器などから西漢初期に位置づけられている。この腰帯具も土器と同時に副葬されたものであるならば、無文で垂孔を持つタイプの最古の出土例となる。湖北省三峡庫区宝塔河遺址六朝墓M9<sup>10</sup>では、方形金具と鉈尾があわせて12点出土している。副葬品は豊富であり、墓の年代は三国後期から西晋中期の間に位置づけられている。湖北省長陽州衙坪M1<sup>11</sup>では、方形金具1点と半円形金具3点が出土している。このM1墓は盗掘にあい、副葬品がほとんど残っていないが、わずかに出土した共伴土器の年代から、興寧三年（365）紀年銘磚が出土したM12墓と同一時期とみなされている。いずれの資料も唐代腰帯具に酷似するが、例えば南北朝期に主流であったのはあくまでも有文透かし彫りで垂飾を有する腰帯具であるので、このように無文で長方孔を持つ金具を備えた腰帯がどのような位置を占めていたのかは明らかでない。



北齊姜觀墓出土立俑

第5図 唐前代の長方孔をもつ腰帯具 (1~6は1:2)

陝西省西安にある北周・安伽墓<sup>12</sup>では、長方孔をもつ尖頭形金具3点、長方孔をもつ方形金具1点、円孔をもつ楕円形金具6点が出土した。このほか、実物ではないが、北齊の徐顕秀墓<sup>13</sup>や婁叡墓<sup>14</sup>に描かれた壁画や人物俑の腰帯には、垂孔をもつ金具をみてとることができる<sup>15</sup>。陝西省西安にある隋・姬威墓<sup>16</sup>では、無孔の方形金具6点、長方孔をもつ尖頭形金具1点、透かし模様をもつ方形金具1点、円孔をもつ楕円形金具2点、如意形孔をもつ円形金具が出土しているが、いずれも玉製である。寧夏回族自治区固原にあるソグド人の墓とされる隋・史射勿墓<sup>17</sup>では、長方孔を持つ方形金具3点、半円形金具2点、円孔をもつ円形金具3点、鉸具が出土している。同じく寧夏回族自治区固原の南塬隋墓M11<sup>18</sup>では、長方孔をもつ装飾的な金具5点と、鉸具、鉞尾が出土している。同様の装飾的な金具は、陝西省西安鳳翔隋墓M299<sup>19</sup>でも出土している。

このように、唐前代の腰帯具の資料数は多くない。また、それらの形態も個体数の割に多様である。ここから逆にみて、定型化され、大量製作されたという点が、唐代腰帯の特徴であると捉えることができよう。

### Ⅲ. 韓半島出土唐式腰帯の様相

#### (1) 文献にみる腰帯

『三国史記』をみると、三国のなかでも新羅の衣服制については、比較的詳しい記録が残る<sup>20</sup>。新羅の衣服制は法興王（6世紀初頭）の治世に初めて定められた。真徳王二年（648）には金春秋が入唐して玄宗皇帝から衣帯を賜り、それ以来唐服制を採用する。文武王四年（664）には婦人の服も唐制に従い、以後、衣冠は中国に同じであるという。また、興徳王九年（834）には、服飾に関する禁令が出され、腰帯については、真骨は研文白玉を禁じ、六頭品は烏犀鍬鉄銅を、五頭品は鉄を、四頭品は鉄銅を、平人は銅鉄を用いるように定められる。唐のように、身分に応じて腰帯具の数量を規定する内容はみられない。また、百済・高句麗の衣服制については、詳細な記録がない。

#### (2) 先行研究

韓半島における唐式腰帯具の出土は、山本孝文氏の集成によると<sup>21</sup>、121本分にのぼる。出土遺跡は、統一新羅時代の墳墓が主で、他に山城や寺院址、都城などがある。これまで、韓半島の唐式腰帯に関する研究は、白杵勲<sup>22</sup>、伊藤玄三<sup>23</sup>、山本孝文各氏によって進められてきたが、なかでも山本氏は、出土資料の網羅的集成を土台とした総合的な分析を行い、製作技法や年代観を初めて具体的に提示した。百済・高句麗地域において、唐式腰帯がほとんど確認されていないことや、銅製や鉄製品が大部分を占めることなど、東アジアの腰帯具を比較検討する上で重要な論点を数多く提示している。

腰帯具の年代について、山本氏は形態変遷から相対編年を組むのは難しいとし、古墳出

土品の共伴土器などを手がかりとして、①初現期（6世紀前半）、②定型・流行期（7世紀中葉～）、③定型性崩壊期（新羅末～高麗初期）という3段階の設定を行った。時代の変遷とともに変化するのは大きさと垂孔の穿ち方で、定型性崩壊期には大型化し、垂孔は鑄造時に設けておく方式から、鑄造後に切り取る方式へと変化するという。また、韓半島の唐式腰帯は中国から導入されたことは疑いないとしつつも、初現期の年代が唐代を大幅に遡ること、そして初現期と定型・流行期の間に1世紀ほどの断絶が存在する（いわゆる倭岩里・皇龍寺型帯金具<sup>24</sup>が間を埋める）ことには留意が必要で、初現期の年代は不安定であり、仮説的に提示しておくとして述べる。

韓半島の腰帯具は多様であり、山本氏が述べるように形態変遷を追うことは簡単ではない。しかし、唐代腰帯受容開始の時期がはたして本当に唐代を遡り得るのか、また、腰帯具の年代について形態的な変遷が追いきれない原因は何なのかなど、解決すべき問題は多い。したがって、まず、韓半島の腰帯具について改めて整理したうえで、前章で整理した中国資料の検討結果を参照しつつ、一步踏み込んだ議論を試みたい。

### （3）唐式腰帯の特徴

中国出土資料と同様に、韓半島出土腰帯具の特徴をまとめておく<sup>25</sup>。

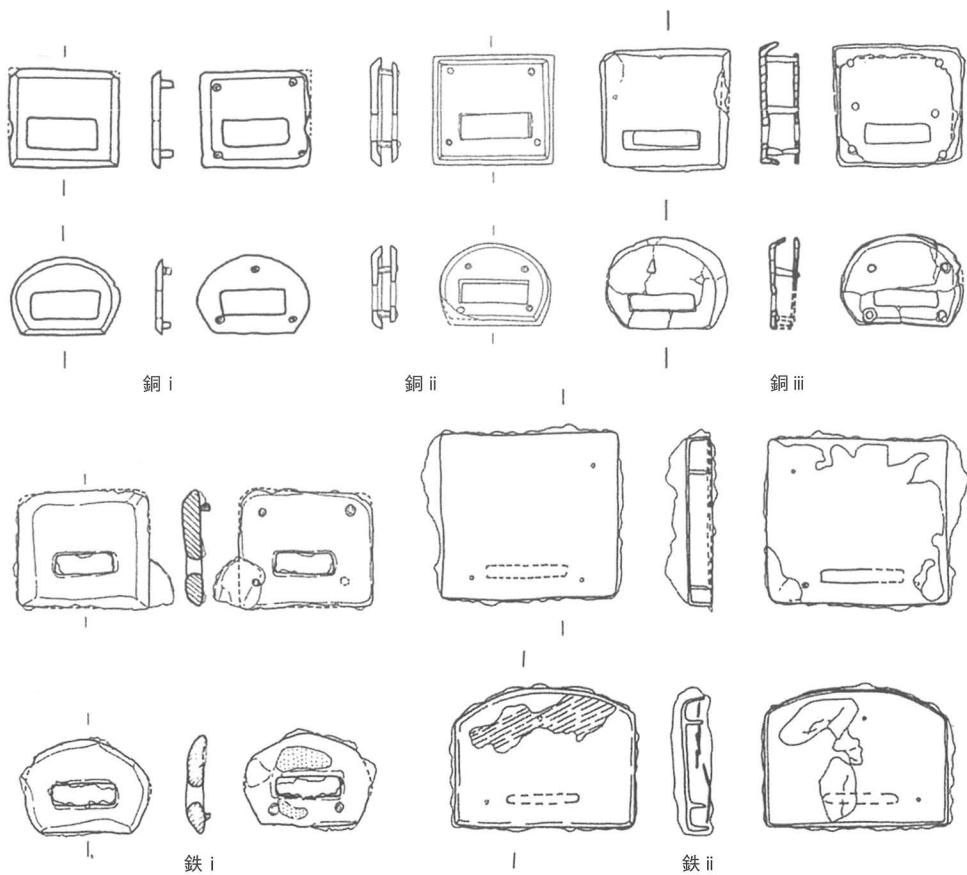
- ① バックル（鉸具）、方形と半円形、帯端金具（鉞尾）を基本とする。
- ② 一本の腰帯に装着される方形金具は4個が、半円形金具は6個が最多であるが、方形のみ装着した腰帯もみられる<sup>26</sup>。
- ③ 材質には銅製・鉄製があり、石製もごく少数ある。
- ④ 腰帯具は表金具と裏金具からなり、両者で帯を挟む構造を基本とする。裏金具は表金具とはほぼ同大か、一回り小さい。表裏の材質は同一素材（銅-銅、鉄-鉄）を基本とするが、異素材（銅-鉄）の組み合わせもみられる。さらに、鉄製品には裏金具を伴わないものがある。
- ⑤ 方形・半円形金具の下方には長方形の垂孔が設けられるが、銅製品には楕円形の垂孔も若干存在する。
- ⑥ 腰帯具を帯に固定するための鉞には、表金具内面に設けた鉞（内鉞）と、外面から打ち付けた鉞（外鉞）がある。銅製品は内鉞を基本とするが、外鉞によって補修したものがある。鉄製品は錆化により分かりにくい、外鉞が基本とみられる。
- ⑦ 表金具の構造に基づき、型式分類が可能である<sup>27</sup>（第6図）。

銅 i : 一枚板で0.1cm前後の厚みをもつもの

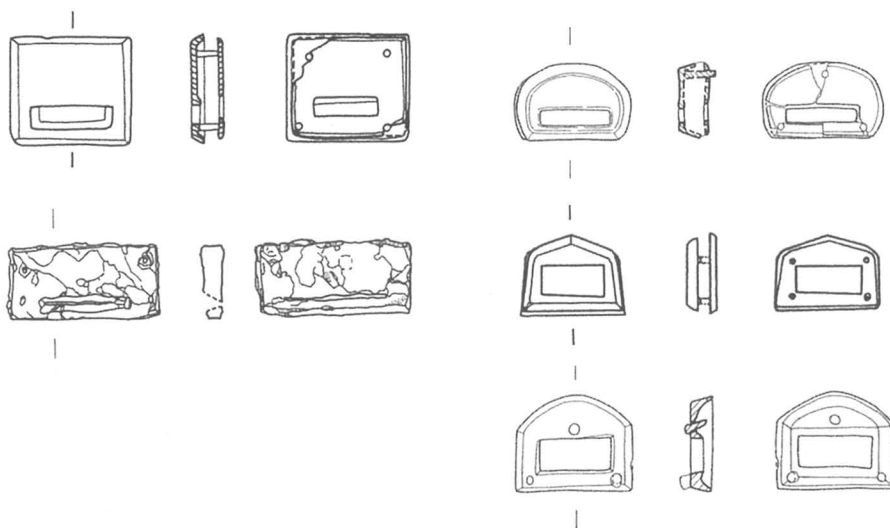
銅 ii : 0.2cm前後のわずかな側面をもち、前面と鈍角をなすもの

銅 iii : 0.5cm前後の明瞭な側面をもち、前面と鈍角をなすもの

鉄 i : 一枚板で0.2～0.5cm前後の厚みをもつもの



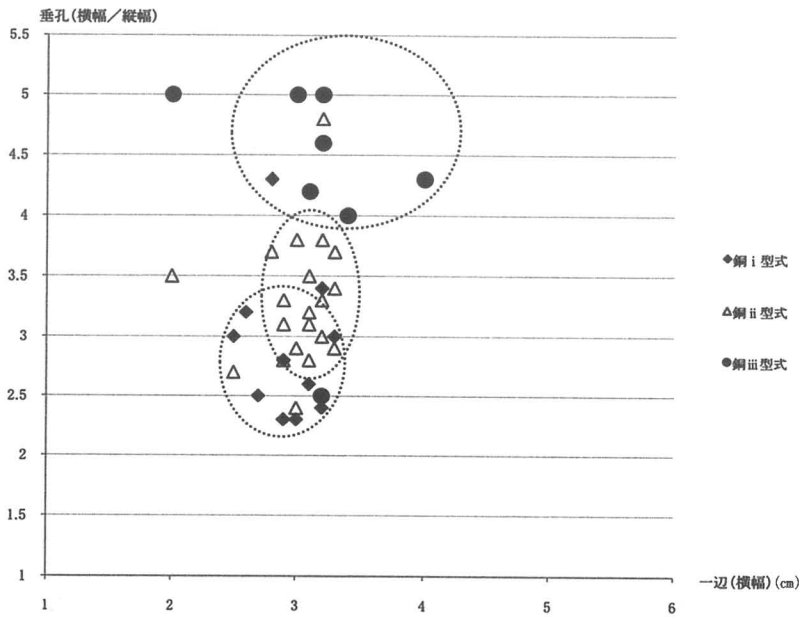
第6図 韓国出土唐式腰帯具の型式分類(1:2)



第7図 方形・半円形金具のバラエティー(1:2)

第6表 韓国出土唐式腰帯具の型式と属性

型式	垂孔 (横幅/縦幅)	裏金具	鋌			方形	半円形	平均寸法 (cm)	
			構造	方形	半円形			方形	半円形
銅	i	有	内鋌 (一部外鋌)	4	3・4	正	半円・山形 半円	2.9×2.4	2.6×1.8
	ii			4・6				3.0×2.6	2.6×1.9
	iii			4				3.2×2.9	2.9×2.0
鉄	i	有・無	外鋌	4	2・3・4	正	半円・蒲鋒・無	2.8×2.4	2.6×1.8
	ii	無?	内鋌?		3	正・横	蒲鋒・無	5.2×4.0	4.0×3.5



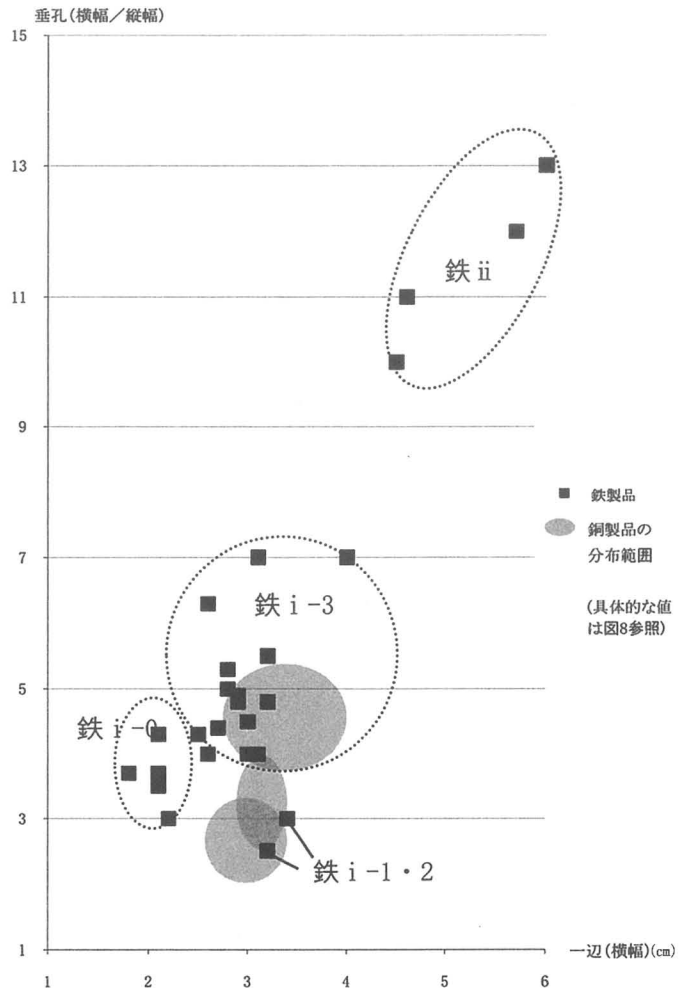
第8図 韓国出土銅製腰帯具の量と垂孔の関係

鉄 ii : 0.5cm前後の明瞭な側面を持ち、前面とほぼ直角をなすもの

- ⑧ 長方孔の形状は、左右辺：上下辺が1対2～3、1対3～4、1対4～5、1対5以上の4種類に大別できる。
- ⑨ 方形金具の形状には、ほぼ正方形を呈するものと、横に長い長方形を呈するものの2種類が、半円形金具の形状には、下辺のみ直線を呈するもの、下・右・左辺が直線を呈し上辺が山形に尖るもの、下・右・左辺が直線を呈し上辺のみ弧を描く蒲鋒形のものの3種類が存在する(第7図)。
- ⑩ 鋌の数は、方形金具が4本、半円形金具が3、4本のもが多いが、前者には5、6本、後者には2本、6本のものも少数存在する。

韓半島出土の腰帯具には出土状況から細かい年代を絞り込めるものが非常に少ない。ただし、諸属性の相関関係<sup>28</sup>(第6表・第8図)を踏まえると、銅製品はi型式からiii型式へ

の変化の方向性を想定することができる。実年代については、銅 ii 型式に 7 世紀中葉～後半頃の土器と共伴するものがあり<sup>29</sup>、副葬年代の 1 点を示している。銅 i、銅 iii 型式の年代は、それぞれ銅 ii 型式の前・後に位置づけてよいと思われるが、具体的な手掛かりに欠ける。ただし、銅 iii 型式は表金具の構造や垂孔の形状が中国資料の銅 III 型式に近いので、8 世紀後半以降に出現した可能性が高い。また、銅 i 型式も中国の銅 I 型式に近いことと、先に示した『三国史記』の記事を参考にして、新羅における唐服採用時、すなわち 7 世紀中葉に製作が開始されたとみとておく。

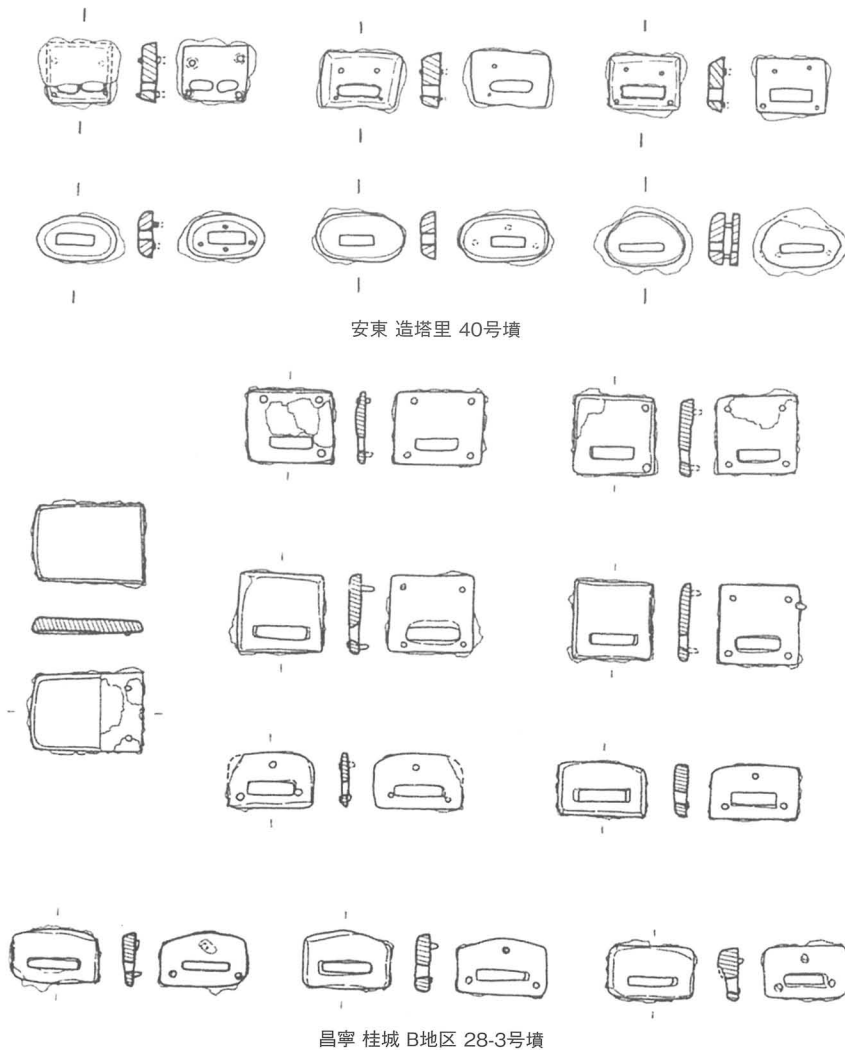


第 9 図 韓国出土鉄製腰帯具の法量と垂孔の関係

鉄製品は銹化の影響で本来の姿を正確に復元することが難しい。したがって、厚みや法量にバリエーションがあるにもかかわらず、それ以上の細分が容易でない。そこで、法量と垂孔に着目して銅製品の型式にあてはめるという方法をとると（第 9 図）、銅 iii 型式と近い値を示す一群（鉄 i-3 型式とする）と、銅 i 型式よりも小型の一群（鉄 i-0 型式とする）に大別でき、この他に、銅 i・銅 ii 型式と近いもの（鉄 i-1・2 型式とする）がわずかに存在するという状況がみとれる。法量と垂孔は年代をある程度反映する属性であるので、銅 i は鉄 i-1、銅 ii は鉄 i-2、銅 iii は鉄 i-3 型式とそれぞれ併行して存在したと考えるべきだろう。

#### （4）小型鉄製腰帯具の位置づけ

では、銅製品と法量や形態を共有しない、鉄 i-0 型式、鉄 ii 型式はどのように位置づけるべきであろうか。まず、鉄 ii 型式についてであるが、法量、垂孔の形状、表金具の構



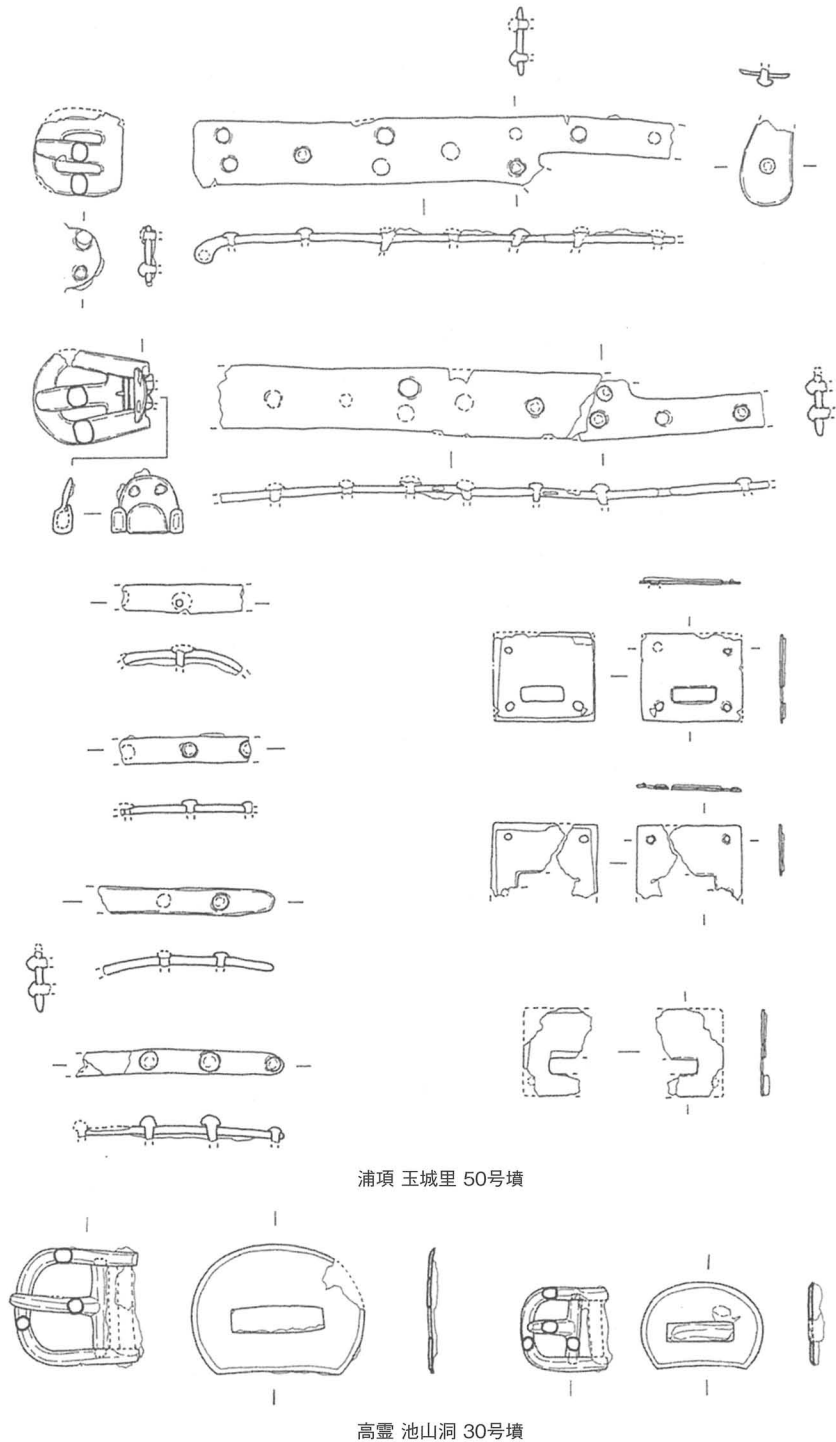
第10図 6世紀代の可能性のある鉄製腰帯具(1:2)

造、いずれの属性からも、銅iii、鉄i-3型式に後続すると位置づけて問題ないであろう。高麗時代の遺跡から出土する腰帯具には鉄ii型式が目立つことも、この想定を裏付ける。

次に鉄i-0型式については、半円形金具が高さの低い蒲鉾形を呈するのを特徴とする。唐代を大幅に遡る、6世紀前半前後の土器と共伴するものが2例見られ(第10図)、これが山本氏の指摘する「初現期」腰帯の一部に相当する<sup>30</sup>。果たして腰帯の副葬年代がそこまで遡るのかどうか、出土状況を再検討する余地があるのかもしれないが、そのような例が複数あることは無視できない事実である。

この鉄i-0型式を銅製腰帯具と比較すると、垂孔の形状は銅ii型式に近いが、法量を見ると鉄i-0型式の方が格段に小さい。したがって、属性の共有という観点から判断する





浦項 玉城里 50号墳

高靈 池山洞 30号墳

第11図 唐式腰帶具に似た形態の胡籙金具・馬具革金具 (1:2)

と、半島内の銅製品に時期的に並行する資料を見出したい。また中国資料をみても、法量的、半円形金具の形態的に、同様の資料は存在しない。以上の状況に共伴土器の年代を加味すると、鉄 i-0 型式の腰帯具は、唐代腰帯の受容以前に韓半島で独自に創出された可能性が高い、と結論付けるしかない。

ここで腰帯具以外の製品に目を向けて手がかりを探りたい。時期は遡るが、伽耶や新羅には唐式腰帯の金具に似た形態・構造を持つ胡録金具や馬具の革金具が存在する（第11図）。それらを見ていると、垂孔をもつ方形・半円形金具は腰帯具に限らず、帯から何かを垂下する際に採用された、もっともシンプルな部品であった可能性が想起される。唐代腰帯の受容以前に韓半島に出現した腰帯が、長方孔をもつ方形・半円形の金具を備えたのは、そのような形態を採用する素地が国内にあったからだと理解できないだろうか。もちろん、先に見たとおり、中国の南北朝にも無文、有孔の腰帯が存在した可能性があり、それらの影響を受けた可能性も十分であろう。したがって、多かれ少なかれ両者が融合して成立したものが、唐式腰帯に似て非なる韓半島独自の小型鉄製腰帯具を備えた腰帯であったと言えないだろうか。このように考えると、この小型鉄製腰帯ののちに、倭岩寺型、皇龍寺型帯金具といった有文の腰帯が出現し、続いて7世紀中葉に唐代腰帯が受容される、という流れで理解することができ、山本氏も問題とした「初現期」と「定型・流行期」の1世紀ほどの断絶が解消する。今後、発掘調査の増加によって、鉄 i-0 型式の年代観が変動する可能性は十分にあるが、いずれにしても、唐式腰帯とは一線を画する可能性が高いのである。

以上をまとめると、韓半島における唐代腰帯の受容は7世紀中葉頃に始まり、当初は唐の腰帯同様、銅製品を主体とした模倣製作をおこなっていた。鉄製品も並行して少数製作されていたが、8世紀後半以降には製作数を増し、次第に銅製品を凌駕していく、という大きな流れを描くことができよう。

#### IV. 韓半島における唐式腰帯具の独自性とその背景

前節までにおいて、中国出土唐代腰帯具・韓半島出土唐式腰帯具の様相と、それらをめぐる状況について明らかにしてきた。双方の腰帯具を比較検討すると、構成や金具の形態、材質などが非常によく似た特徴を持つと言える。特に銅製品に関しては、中・韓いずれの資料か見分けが付かないほどである。また、垂孔や法量をはじめとする属性の変化の方向も、両国間で同様である。一方で、双方の差異の中でも特に注目されるのは、銅製腰帯具の銚数と、鉄製腰帯具の出現時期である。

まず、銅製腰帯具の銚数について、中国出土の半円形金具は3箇所を基本とするのに対し、韓半島では4箇所のもものが3箇所とほぼ同数存在する。これは、帯への固定をより強

固にしようと試みた結果とみられるが、唐代腰帯とは外見は同様であっても製作技術が異なることを意味する。換言すると、韓半島では唐代腰帯そのもの、すなわち唐製品が使用されたのではなく、半島内で模倣製作した国産品が流通していたことになる。

また、鉄製腰帯具の出現時期について、唐では中唐まで下るとみられるのに対し、韓半島では7世紀中葉と1世紀近く早い。唐代腰帯の受容開始時に、唐の材質構成までは完全に模倣せず、独自に素材の選択をおこなったのである。銅製腰帯具の表面には黒漆を塗布したものが少なからず確認できるが、鉄製品にも同様の黒漆を塗布したとすれば、外見上区別がつかない。だからこそ、鉄を採用したのだ、とすると、その背景には、原料銅の入手が鉄よりも困難であったとか、技術的に鉄で製作した方が容易であったなどの理由が考えられよう。現時点では俄かに結論できないが、すでに6世紀前半頃、鉄製腰帯具が存在していたことを勘案すると、鉄で腰帯具を製作する技術が伝統的に存在し、それゆえ唐式腰帯の製作に際して、鉄素材の選択が比較的容易であったという可能性は考えてよいかもしれない。

この他にも、鉄製腰帯具には半島独自の特徴がいくつかみられる。横に長い方形金具が存在する点（鉄 i-3・鉄 ii）、一枚板ではなく側面をもつ鉄製品が存在する点（鉄 ii）、方形のみで半円形が伴わない腰帯が存在する点（鉄 ii）などである。それぞれの特徴が出現した契機や理由については明らかにし得ないが、ここで重要なのは、これら半島独自の特徴が、特に鉄 i-3・ii 型式といった、鉄製品の後出型式に集中するという点である。唐代腰帯受容開始時には、材質や鍍など表面に見えにくい部分は違っても、外見的に唐のものによく似せた腰帯を製作していたが、鉄 i-3・鉄 ii 型式が出現する段階になると、外見的にも大幅に異なる腰帯が製作されたことになる。特に、鉄 ii 型式は、同型式内での法量のばらつきが大きい。逆に、鉄 ii 型式と銅製品とを比較すると、銅製品の定型性が際立つ。

唐代腰帯の受容当初は、唐製品の模倣と、定型性が維持されていたにも関わらず、徐々に唐式からの乖離と、定型性を崩していく背景には何があったのだろうか。統一新羅では8世紀後半以降、王族内部の確執を原因とする権力闘争により、反乱の頻発、王位争奪が繰り返されたという<sup>31</sup>。中央政権の弱体化により、地方を舞台とする反乱もあいついだ。そのような政治的な混乱が続く中、貴族達は身分秩序を越えて奢侈に耽ったようで、それを統制したものが興徳王九年（834）に出された生活全般に関わる禁令である。その令文に腰帯が含まれることは先述の通りであり、このような状況下で、唐代腰帯の受容が続けられ、画一的な腰帯が製作されたとは到底考えにくい。韓半島における唐式腰帯の独自性は、このような国家の混乱を如実に反映した結果であると言えるだろう。腰帯具にみられる定型性の崩壊が、統一新羅政権の社会情勢を反映したものであるという解釈は、すでに

山本孝文氏によって提示されているが、本稿で試みた中国・韓半島の腰帯具の型式設定・属性比較によって、韓半島の唐式腰帯具が唐様式から乖離していく過程を具体的に描き出すことができたと思う。

## V. おわりに～東アジアにおける唐代腰帯の受容

最後に、韓半島における唐代腰帯の受容について改めてまとめておく。7世紀中葉頃、唐の衣服制の受容に伴って唐式腰帯を導入し、それに装着する金具を主に銅素材によって模倣製作していた。鉄素材も選択され、銅製品と同型式の製品が製作されたが、あくまでも少数であった。8世紀後半以降には、徐々に鉄製品が主体となり、さらに唐とは異なる構造・形態・構成の腰帯具を備えた腰帯が増加する。このような状況は、統一新羅の中央政権の弱体化とそれに伴う国家の混乱を反映したものとみられる。

隣国日本でも、唐代腰帯が受容されており、その具体的な様相についてはすでに別稿で検討したことがある<sup>32</sup>。簡単にまとめると、8世紀初頭に唐代腰帯の受容を開始し、銅素材を用いて忠実に腰帯具の模倣製作をおこなっていたが、8世紀末以降、石製へとほぼ完全に材質転換する。材質転換した背景には、鑄銭のための深刻な原料銅不足があったとみてよい。韓半島と比較すると、鉄素材の選択が積極的でなかったとみられ、唐様式から乖離する際に選択された素材が異なることは大変興味深い。

両国の様相を総括すると、ほぼ同様の時期に唐代腰帯の模倣から離れ、独自性の強い腰帯の製作を始めていると言える。それぞれの国内事情が大きく影響していると思われるが、それに加えて、唐が安史の乱以降国力を弱めていったことも影響しているかもしれない。いずれにしても、東アジアにおける唐代腰帯の受容は8世紀後半を一つの画期として変容した、という見通しを掲げておくが、今後は渤海における唐代腰帯の様相も詳細に検討する必要がある。さらには、腰帯という制度に関わる文物のみならず、生活、経済、宗教に関わるものなど、様々な性格の文物にまで裾野を広げて、唐代文化の拡散の様相を考古学的視点から明らかにしていきたい。

謝 辞 資料の実見に際して、以下の機関の皆様のご高配を賜りました。感謝いたします。

漢陽大学校博物館、国立清州博物館、国立扶余博物館、国立公州博物館、弥勒寺遺物展示館、国立慶州文化財研究所、国立慶州博物館、東国大学校博物館、国立金海博物館。

## 註

- 1 腰帯には織物製や革製、飾り金具を配した革帯など様々な種類があり、日常・非日常の別や、儀式のレベルに応じて、衣服とともに取り替えられていたようである。これらのうちどこまで周辺諸国に受容されたかは不明である。本稿では、常服（官人の日常の衣服）に用いたという、長方孔をもつ金具を取り付けた革帯（環帯B。毛利光俊彦「古代中国の腰帯」『文化財論叢Ⅲ 奈良文化財研究所創立50周年記念論文集、奈良文化財研究所学報第65冊、奈良文化財研究所、2002年）について着目する。
- 2 本稿において、唐で製作された腰帯は唐代腰帯、周辺諸国で唐代腰帯を模して製作されたものは唐式腰帯、と呼び分ける。
- 3 『唐会要』卷三十一章服品第 上元元年八月二十一日勅。
- 4 景雲二年（711）には位階による材質の規定は見られるが、個数の規定がみられない（『唐会要』卷三十一 章服品第 景雲二年四月二十四日制）。出典によっては上元元年の時点で個数の規定がないものもあり（『旧唐書』第四十五輿服志）、規定の変更の記録が他にないことから、記載漏れの可能性がある。少なくとも当初、唐が目指したものが、材質と数による位階表示であったことは確かであるといえる。
- 5 寧夏文物考古研究所・呉忠市文物管理所『呉忠西郊唐墓』文物出版社、2006年、同『呉忠北郊北魏唐墓』文物出版社、2009年。
- 6 これまで、日本の唐式腰帯具研究においては、『倭名類聚抄』腰帯類項などを根拠に、方形金具を巡方、半円形金具を丸軋と称してきたが、本稿で中国、韓半島資料を扱うにあたっては、当時、巡方、丸軋と呼ばれた腰帯具の範囲を特定することが難しいため、形態的名称を用いる。
- 7 中川あや「唐鏡の変遷」『考古学雑誌』第88巻第1号、日本考古学会、2004年。もちろん鏡は一般の副葬品にくらべ、製作から土中に埋まるまでの伝世期間を長めに考慮する必要はあるが、上限年代は示しうるのでその点で有効である。また、呉忠西郊・北郊唐墓では合葬墓が多く、腰帯具とその他の副葬品が同時埋納でない可能性も十分にある。ただし、一つの墓からの出土遺物が少ない状況で、その可能性の検証は困難である上、後述するとおり、想定される腰帯具の型式学的変遷と共伴遺物の年代に一定の相関がみられるため、とりあえず腰帯具と他の副葬品の年代に大幅な開きは無いものと判断しておく。
- 8 銅鉄帯という規定が、銅、鉄のいずれか、というものであって、その選択に地域色が出た可能性もある。ただ、現在出土している銅製品が、衣服令にみられる「鍤石」に相当するのか、「銅鉄」の「銅」に相当するのか判断つかないため、それ以上の結論は出せない。
- 9 陝西省考古研究所『高陵張卜秦漢唐墓』三秦出版社、2004年。
- 10 三峡湖北工作站・武漢大学考古系・巴東県博物館「三峡庫区宝塔河遗址六朝墓葬發掘簡報」『江漢考古』2002年第1期。
- 11 湖北省清江隔河岩考古隊・湖北省文物考古研究所「伍 東漢-唐代墓葬 三 州衙坪六朝中期墓」『清江考古』科学出版社、2004年。
- 12 陝西省考古研究所『西安北周安伽墓』文物出版社、2003年。
- 13 太原市文物考古研究所『北齊徐顯秀墓』文物出版社、2005年。
- 14 太原市文物考古研究所『北齊婁叡墓』文物出版社、2004年。
- 15 一見円孔をもつ円形金具が目立つが、長方孔をもつ半円形に見えるものもある。ただし、実態をどこまで正確に反映しているかはわからない。
- 16 陝西省文物管理委員会「西安郭家灘隋姬威墓清理簡報」『文物』1959年第8期。
- 17 寧夏回族自治区固原博物館『固原南郊隋唐墓地』文物出版社、1996年。

- 18 寧夏文物考古研究所『固原南塬漢唐墓地』文物出版社、2009年。
- 19 陝西省考古研究院・西北大学文博学院『陝西鳳翔隋唐墓』文物出版社、2008年。
- 20 『三国史記』 卷第三十三雜志第二色服条。
- 21 山本孝文「韓国の唐式鍔帯について」『古文化談叢』第52集、九州古文化研究会、2005年。
- 22 白杵 勲「韓国の鍔帯金具에 대하여」『伽倻通信』18、伽倻通信編集部、1988年。
- 23 伊藤玄三「統一新羅の鍔帯金具」『伊東信雄先生追悼考古学古代史論攷』伊藤信雄先生追悼論文集刊行会、1990年。
- 24 李漢祥「6世紀代 新羅의 帶金具-‘樓岩里型’帶金具의 設定-」『韓國考古學報』35、韓國考古学会、1996年。李漢祥「7世紀 前半의 新羅 帶金具에 대한 認識」『古代研究』7、古代研究会、1999年。
- 25 出土資料の分析は、山本氏の集成と、それ以後に公表された出土資料に基づいておこなった。また、山本氏の集成のうち、高麗時代のもは唐滅亡後のものであるので、ひとまず省いた。
- 26 攪乱などにより、副葬時の明確な個数を推定できる資料が存在しない。
- 27 石製品については益山弥勒寺出土例しか確認されていないため、本稿では型式分類から省く。
- 28 山本氏が年代を反映するとして垂孔の穿ち方については、鑄造後に垂孔を切り取ったとみられる資料、垂孔を設けない資料がごく少数しか確認できなかったため、今後の検討課題としたい。
- 29 慶尚北道漆谷永梧里4号墳、18号墳など。慶尚北道文化財研究院・韓國道路公社『龜尾-琴湖間京釜高速道路 擴張區間内 文化遺蹟發掘調査報告書』2001年。
- 30 山本氏が「初現期」とした資料には、このほか蔚山早日里遺跡出土腰帶具があるが、これは内部攪乱土出土であるうえ、銅Ⅲ型式に分類されるため、後代の混入と理解した方がよいだろう。
- 31 武田幸男編『朝鮮史』新版世界各国史2、山川出版社、2000年。
- 32 中川あや「金属器の受容-唐代金属器の入手と模倣生産」『専門技能と技術』列島の古代史5、岩波書店、2006年。

#### 図版出典

第1・2・3図：註5文献を一部改変。

第5図：註9～12・14・17・18文献を一部改変。

第6図：銅ⅰ 明知大學校博物館『山本地区 文化遺蹟 發掘調査 報告書』1990年、銅ⅱ 韓國文化財保護財團『慶州市 隍城洞 537-2 賃貸아파트 新築敷地 發掘調査 報告書』2001年、銅ⅲ（財）忠清文化財研究院『大田 自雲洞・秋木洞遺蹟』2004年、鉄ⅰ 慶尚南道・釜山大學校博物館『陝川 苧浦里 E 地區遺蹟』1987年、鉄ⅱ（財）湖南文化財研究院・益山地方國土管理廳『完州 葛洞遺蹟』2005年、以上を一部改変。第7図：方形 国立清州博物館・清州市『清州龍潭洞古墳群 發掘調査報告書』2002年、橫長 河南省・漢陽大學校博物館『二聖山城 10次發掘調査報告書』2003年、半円形・蒲鉾形 韓國文化財保護財團・大田地方國土管理廳『陰城梧弓里・文村里遺蹟』2001年、山形 明知大學校博物館『山本地区 文化遺蹟發掘調査報告書』1990年、以上を一部改変。第10図：慶北大學校博物館『安東 造塔里古墳群Ⅱ（'94）』1996年、釜山大學校博物館『昌寧桂城古墳群』1995年、以上を一部改変。第11図：慶尚北道文化財研究院『浦項 玉城里古墳群發掘調査報告書』2003年、社團法人嶺南埋藏文化財研究院・高靈郡『高靈池山洞30號墳』1998年、以上を一部改変。

## 고대 한반도에서의 唐代腰帶 受容

中川 あや (나카가와 아야)

요 지 唐代에 官人의 복장 일부로서 제도화 된 腰帶는 주변 여러나라에서 唐制의 受容에 수반해 각국으로 도입되었다. 신분제도에 관련한 장신구 중에서 현재까지 형태를 남기고 있는 것은 腰帶에 장착된 金具(腰帶具)뿐이라 해도 과언이 아니며, 당문화의 확산 양상뿐만 아니라 衣服制度의 실태와 그 배경에 있는 사회 정세를 엿 볼 수 있는 희유한 유물이다. 본고에서는 고대 한반도에서 唐代腰帶가 어떻게 受容되었는지 확실하게 밝히는 것을 목적으로 한다. 기초 작업으로 중국 출토자료와 한반도 출토자료를 대상으로 表金具의 구조에 의거한 형식 분류를 했다. 그것을 비교 검토한 결과, 고대 한반도의 唐代腰帶 受容은 7세기 중엽 경에 시작되어, 당초에는 당과 같은 형식인 銅素材를 주체로 한 腰帶具의 제작을 했지만, 8세기 후반 이후 서서히 당과는 다른 구조, 형태, 구성의 鐵製腰帶具가 증가하는 흐름을 분명히 했다. 이러한 상황은 통일신라의 중앙정권 약체화와 거기에 수반해 국가의 혼란을 반영하고 있을 가능성이 있다. 또 인접국인 일본의 상황과 비교하면 거의 같은 시기에 唐代腰帶의 모방이 정체했고, 唐代腰帶具는 동아시아에 있어서 당문화의 受容과 전개를 생각할 때 주목해야만 하는 하나의 재료라고 할 수 있다.

주제어 : 腰帶 당 한반도 受容

## The Acceptance of Buckled Belts from Tang China on the Ancient Korean Peninsula

Nakagawa Aya

**Abstract:** In the Tang period, buckled belts were incorporated as part of the dress code for government officials, and were introduced to neighboring countries along with the adoption of the Tang administrative system. Of personal ornaments related to the system of rank, it is no overstatement to say the only items that retain their original form are the metal fittings attached to these belts, making them rare artifacts for glimpsing not only the diffusion of Tang culture, but also the actual state of the dress code and the social conditions which stood as its background. The aim of this contribution is to clarify the manner in which Tang period buckled belts were received on the ancient Korean peninsula. As a basic task, typological classifications were conducted, based on the structure of metal fittings used on the outer surfaces of belts, for materials recovered from China and from the Korean peninsula. As a result of comparative analysis the following sequence was demonstrated: the acceptance of Tang period buckled belts on the ancient Korean peninsula began around the mid-seventh century, and at first metal fittings were made mainly of copper as in Tang China, but from the latter half of the eighth century on iron fittings, differing from Tang items in structure, form, and composition, gradually increased. This situation possibly reflects the weakening of central authority of Unified Silla, and the political turmoil that attended it. Meanwhile, comparing the situation in neighboring Japan, imitation of Tang period buckled belts was halted at nearly the same time, and thus Tang buckled belts may be called noteworthy data for considering the acceptance of Tang culture and its subsequent development in East Asia.

**Keywords:** Buckled belts, Tang China, Korean peninsula, acceptance of culture